

— 第28編 — 銀鉱山の商都、ゴスラー^{*1}

ハンブルクの南方約180kmに位置するゴスラーは、10世紀後半に偶然発見されたハーツ山麓^{*2}の銀鉱山によって栄えた。13世紀にはハンザ同盟^{*3}にも加盟し、イギリスやフランスなどとの積極的な交易を通して、中世には小さいながらも大変豊かなまちとなった。豊か



写真 28-1 装飾を纏った商家の木造ファサード

になるにつれて、まちの木造建築の多くが優美な装飾を纏うようになる。ちよつと歩くだけで、その建物外部の木部や壁面に扇型や貝殻の形をあしらった彫刻がそこかしこで目を引く(写真28-1)。このような装飾が広まったのは1530年頃からだ。広域の商いを通じてアルプスの南から伝えられた当時のイタリア・ルネッサンスの影響を強く受けたものである。大木の桁や外壁の板に彫られたシュロの葉の一枚一枚に、青、黄、緑、赤の色彩が鮮やかに施されている。ただし、このような装飾は、銀鉱山の作業に従事している者のなかでも、組頭以上の住まいに限られていた。

道沿いの町家は上階(3〜4階)が1〜2階の低層部よりも張り出す構造が特徴で、下から見上げるその家並には迫力がある。道路から最上階の滑車で荷物の出し入れができるようにした工夫がこの形態を生んだ。ゴスラーでは建物の70%近くが中世当時のままに保存されており、往時の雰囲気の色濃く今に残るまちなみとして世界文化遺産にも登録された。町を中心に賑やかな市が立つ小ぶりのマルクト広場があるが、そこに通じる幅3mほどの狭い石畳の通りは意図的に蛇行してつくられた。カーブの膨らみで馬車がすれ違ふことができるようにするためである。そんな通りには、かつて銀山に昼夜三交代で働いた鉱山労働者が日中安眠できるように、窓の小さな2階建ての民家が連続して並んでいる。ゴスラーの魅力は中世のまちなみだけではない。神聖ローマ帝国時代の皇帝の館、近郊にある銀山の施設群と鉱山、周囲の豊かな自然、そして町中に点在する美術館やモダンアートの作品群等々。こうして、歴史と現代が程よく静かに調和するまちの姿に、心が洗われること請け合ひである。



写真 28-2 中世の街並みと現代アート

*1
Goslar: ハーツ地方の主要都市。人口約9万

*2
ハーツ山麓: ハーツ山中部東方に位置する山地

*3
ハンザ同盟: 中世後期、欧州北部経済圏を支配した都市同盟